

原 著

社会福祉における人間観の課題 —生成的側面への焦点化—

直 島 克 樹^{*1}

要 約

本研究は、社会福祉を考えていく上で必要不可欠となる人間理解について、主に西洋社会に焦点を当てることによって、現代へと至る人間観のプログラムを明らかにし、新たな理論的展開を視野に入れた今後の社会福祉における人間観の課題について、考察を深めていくことを目的としている。

これまでの人間観の歴史的なプログラムは、啓蒙運動の影響もあり、自由で自律性をもった理性ある人間像を作り上げてきたが、現代においては経済的側面からの規定が強く進み、その側面からの個人主義が社会福祉における人間観を規定してきていることが明らかである。しかし、社会福祉はそこで規定されるいわゆる弱い個人から強い個人への変換を目指すという二項対立的な理解に収まるものではなく、そのため、Herderにみられるような相互依存する人間の生成的側面への検討を深めていく必要があることが明らかになった。

そのことは、二項対立的な人間観から常に生成変化する人間観という理解の必要性を喚起している。また、平均的な個人への収斂という枠を超え、文化や時間を視野に入れた差異を持った存在として考えていくことでもある。そのため社会福祉においては、相対主義による排他的側面に注意しながらも、常に反本質的に可変性をもった人間観が課題となることが考察された。

は じ め に

社会福祉を考えていく上で、その基盤となる視点をどこに設定していくかという点は、必要不可欠な検討課題と言わねばならない。しかしながら、近年では様々な実践領域における技術や制度・政策的動向が個々に議論され、その点に対する検討が盛んに行われている反面、その検討の基盤となる視点が中心的に考察される機会はあまり多くないといえよう。これは決してそういった考察が無意味であるということを意味しない。むしろ、これからの社会福祉を考えていく上では欠くことができない論点である。

例えば中村¹⁾は、社会福祉の原点は人間にあり、人間をいかに捉え、理解するかという点に、社会福祉学としての根本的な問いがあると述べる。すなわち社会福祉学は、自らの枠組みとして、固有な人間理解が求められる。つまり、社会福祉にとって、人

間と社会との関係性は最大の関心事であり、特にこの人間個々の視点を重視することが求められる。そのため、そこでの人間理解は社会福祉の理論を考えていく契機となるといえよう。

しかし、この問いは、容易にみえて実は最も困難な課題の一つでもある。後述で明らかにするように、人間観は宗教的な背景から近代化に伴う経済的・政治的背景の中で大きく変化している。したがって、社会福祉における人間観を検討するには、その歴史が生成してきた人間観のプログラムを明らかにしなければならない。人間観のプログラムとは、変遷・生成する人間観において、社会の中心的な捉え方として組み込まれることであり、それに従って社会の様々な側面が形成されていくことを意味している。その組み込みの特徴が明確になって初めて、社会福祉は自らの固有の人間観を考えることができるのである。

そこで本稿では、近代社会以降において社会福祉

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 直島克樹 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail : k-naoshima@mw.kawasaki-m.ac.jp

が主に制度や実践として体系化し、展開され始めたことを踏まえ、その近代化を推し進めた西洋における人間観の歴史的な変遷を明らかにし、その特徴を検討していく^{†1)}。この中で、近代社会の形成の基盤ともなった啓蒙思想に着目し、その特徴を明らかにしながら、人権の形成との結びつきを明らかにしていきたい。また、啓蒙思想のもつ自然と分離した人間に対する考えに異議を唱え、その全体性や統一性を主張し、経済的・政治的側面よりも“文化”の側面に焦点を置いた人間観に着目していく。それは、一律に固定化された人間観ではなく、関係性のもとに変化していく人間観であり、そこから社会福祉の有する人間観の課題を明らかにすることによって、基盤となる人間観の考察を深めていきたい。

1. 西洋における人間観の歴史的変遷

社会福祉の基盤となる視点に関して検討していく場合、近代社会の形成と同時に、人間理解がいかに変化してきたのかを検討することは避けることができない。例えば柏女²⁾は、福祉観が揺らいでいる状況において、人間存在の有りようを問うことは、社会福祉を考えていく上で不可欠なことにも関わらず、社会福祉固有の問題として十分に論じられていないことを指摘していた。それは、現在にあって、変わらず当てはまる指摘であると考えねばならない。今後の社会福祉を考える上での、真の社会福祉のパラダイム転換を達成するためには、人間存在の有りようや福祉観、そして人間観に対して深い洞察が求められるのである。

特に、人間観の変遷は近代社会の形成と密接に結びついていると考えねばならない。近代は中世の精神の否定や教会支配への対立などによって成立したものであり、この意味を問うことによって、社会福祉の理論的展開が可能となる³⁾。社会福祉の原点は人間にあることを前提に、ここでは特に西洋社会に着目し、その人間観の歴史的な変遷を先行研究から明らかにしていく。

西洋における人間観の変遷を検討する場合、宗教的側面、特にキリスト教との結びつきを無視することはできない。西洋社会においてはキリスト教の存在が大きな影響力をもっていたのであり、人間観の変遷はキリスト教の変遷とも密接に関連するものである。

例えば、権力の側が自らの根拠をキリスト教思想の倫理に求め、神の名の下に権力を行使していく一方で、キリスト教の教会組織は、その倫理観を社会の最下層にある人たちまで普及し、教化していくという状況が中世の西洋社会であった⁴⁾。関家⁴⁾

によれば、「社会的弱者の状態を半永久的に固定化させ、社会的暴動を阻止させたものがキリスト教思想であり、とくに、その倫理的価値（愛・忠誠・忠実・禁欲・勤勉等）の果たした役割は計り知れない」のである。当時のそういった社会における人間とは、神の教えに従う受動的な存在でしかなく、生活は神の教えのもとに統合され、それに従うことに価値が見出されていたのである^{†2)}。

歴史的に有名なルネサンスは、そういった人間を受動的な存在に位置づける宗教的側面を顧み、本来の宗教的原点への回帰を目指したのもであった⁴⁾。特にその時代に描かれた裸婦像には、人間をキリスト教的倫理観の支配、ローマ・カトリックの支配から解放することを含んでいた。そして、主に商人や職人などの生活者の側から、その解放によって再発見された人間的なるものすべてを肯定し、尊重しようとするヒューマンイズムの精神に貫かれた新しい価値観の提唱があったのである^{4)†3)}。

このルネサンス期に構築された新しい人間観とは、第一に、人間の本性（感性）の世界を肯定し、それを理性と調和させることを目指していた。それは、神や教会に追従する非主体的な人間ではなく、あらゆる偏見と先入観とを捨てて、いかなる世俗的権威にも惑わされることのない存在者を意味し、①自己の無限な能力を信じ、②事物を他者ではなく直接自己の感性によって捉え（I feel）、③捉えた資料を自己の頭で整理し（I think）、④かつ判断し（I understand）、⑤この判断に基づいて行動しうる人間（I do）という人間観が構築されたのである⁴⁾。こういった人間観こそが、その後の近代社会形成の土台となる思想的萌芽となったと考えられるのである⁴⁾。

自己の内面への回帰（魂の救済）を本質的と位置づける宗教改革などを経て、西洋社会は近代社会成立の段階へと歩み出すことになる^{†4)}。特に、パチカン権力からの独立が進むことにより、民族国家が形成されたが、その際に強く主張されたのが上記で示したような主体的で自由な存在としての人間観であった。また、これまで聖職者や特権階級のものであった学問が、一般階級にも解放されたことなど⁴⁾も、近代社会へ向けた大きな要因となったと考えられるのである。

上記の人間観の確立をより積極的に浸透させようとしたのが、17世紀から18世紀に起こった思想運動としての啓蒙思想であったと考えられる。そこで示された人間観とは、誰にも束縛されない自由な存在としての人間であり、その人間は合理的に物事を判断し、その理性はすべてを理解することのできる絶

対的なものであるということであった。すなわち、自由な個人、理性ある個人として位置づけられたのである。

以上から明らかなように、生活者の権利を獲得するための立場から生じた人間観が社会化されたのであり、近代社会への流れは、まさにそういった主体的な権利を求めた人間観のプログラム化の歴史でもあろう。次節ではその主体的な人間観の形成に貢献した啓蒙思想について検討し、その意義と特徴を確認する中で、現代における人間観の考察を深めていきたい。

2. 啓蒙思想による人権の形成と現代における人間観の特徴

「ヨーロッパの啓蒙思想が今日の人権観に与えた影響は、他の文明のそれを上回っていたことも確かである」⁵⁾と述べられているように、人間観に大きな影響を与える人権の確立にとって、啓蒙思想は重要な働きを果たしたのである。新約聖書やコーランなどの中には同性愛者や女性等を見下す記述があるとともに、過去の文明においても、普遍的道義観の背後には弱者に対しての不平等な扱いを正当化する考え方があったことも事実である。そういった中で啓蒙思想を通じた西欧の普遍的な人権概念の形成は、現代に至る社会にとって極めて大きな影響を持っていたのである^{5)†5)}。むしろ、人間観を焦点とするのであれば、近代社会は人権の形成なしでは考えることなど出来ないであろう。

すでに確認してきたように、そもそも近代とは、中世の精神の否定と、教会支配への対立によって成立したものと考えねばならず⁴⁾、啓蒙思想としての運動は、特権的な身分制度、宗教勢力によって支配・抑圧されていた人間個々の解放として位置づけられるものである。例えば、宗教改革を通じ台頭したプロテスタントの考えは、幸福における個人の責任を求めると、キリスト教とは離れた個人意識を形成することに貢献し、啓蒙思想を推し進める契機となった⁵⁾。つまり、そこで求められたのは教会と国家の明確な分離であり、神の名のもとに特権化された制度を見直し、人間の一般的な意志を拠り所とする国家と個人との社会契約の発想である。

宗教を基本的に個人の内面との関わりに限定し、宗教とは離れた国家と個人との社会契約の発想が、その論理的構造上、後に全体論的な方向性に導いてしまった大きな要因であるという歴史的事実は否定できないが、人間の価値を宗教的な信仰から離れて可能にし、生存権などの基本的人権として国家の制度の基盤となる構造を導いた点は、現代か

らその先の未来へと評価していかねばならないであろう^{†6)}。

つまり、この人権の一つの特徴は、それが“抵抗の原理”であるという点にある。人権とは、様々な抑圧に対して抵抗していくことを主眼とする原理なのであり、個々の人々の立場から生活を考えていく指針となるものである。それは現在の単なる客体的な意味での“ニーズ”のような概念とは異なり、あくまでも社会的に抑圧された主体的な生活への抵抗を含んだものとして考えられるものである⁶⁾。すなわち、個人の権利の実現を目指す変革性をその視点にもつものなのである。

啓蒙思想がこの人権の普及に大きなきっかけを与え、貢献を果たしたことは明白であるが、それは、これまで神の前で受動的でしかなかった人間を、より能動的な存在として捉えなおし、人間中心主義の発想を確立したと結びつくのである^{†7)}。啓蒙主義の時代は“理性の時代”と呼ばれるように、人間の理性こそが宗教や身分を超えて、人間に対してより具体的な指針を与えるものと認識されたのであり、それはフランス革命で一つの最高点に達したのである⁵⁾。

ただし、後の啓蒙思想による取り組みが、例えば、公共の福祉とも関連してくる参政権のような政治的権利と、海外貿易によって台頭した中産階級の権利と関連する私的財産権のような経済的権利を調和できなかった⁵⁾ ことを見逃してはならない。一つの人権観として、「ローマ的な愛国心という普遍的な忠誠と、個人投資家の自己中心主義の間を行ったり来たりするユニークで重大な論争」⁵⁾とも結びつくものである。それは公私の在り方を踏まえた公共性の問題でもあるといえよう。その中で後期の啓蒙主義による取り組みは、レッセフェール経済による私的財産権を優先する方向性を重視したことは明白である。それは近代社会における人権を、個人主義的自由に基づいた人間観へその意味を変化させていくことになった。差別的な参政権が多くの国でなくなった現在でもなお、先進国としての西洋の政治家にはその私的財産権のような経済的側面を重視する方向性は継承されていると考えねばならない⁵⁾。

この影響の大きさは、文明開化によって西洋の影響を受けた日本の近代化においても確認することができる。例えば、明治維新時に近代化の基礎を築いた一人である福沢諭吉も啓蒙思想家の代表的人物であり、日本文明の将来を、日本国民一人ひとりが独立の私権を確立することによって可能となることを説いていた。「近代国家としての日本の真の独立は、政権への価値の集中が排除され、政権に拮抗し

うる私権が、いいかえれば公的な国家の世界に均衡する私的な個人の世界が確立されてはじめて達成されるという透徹した認識にたち、私権の確立と個人の独立とはどのようなものであるかを身をもって示した⁷⁾のが福沢であった。さらに、福沢が明治政府への出仕を固辞し続けつつもその言論活動が影響を与えたように、啓蒙思想がただの理念に留まるものではなく、実践的性格をも有すことがうかがえるのである^{†8)}。

私的な側面を強調する個人主義としての人間観こそが、19世紀から20世紀にかけての資本主義に基づいた近代社会に影響を与えてきたと考えねばならない。そのため、こういった主体性の主張が、西洋においてはそもそも経済的に財を成し、そこから政治に影響をもった一部のブルジョア階級から起こったという点は見逃すことができないであろう。結果として、この自律的な人間観は、現代においては市場原理主義でもあるネオリベラリズムの一つの根拠としてその意味を変化させてきている。Giddensと渡辺⁸⁾が分類する「獲得型個人主義」は、個人の自由や自律を絶対的に捉え、個人の利益が共同体の利益より優先されると考えるものであり、そこにはその歴史的な変化を考えることができるのである^{†9)}。むしろ近年の社会は、政治や経済の立場から形成された個人主義としての人間が強く求められ、それが想定されてきていると考えねばならないのであろう。

この点について中西⁹⁾は、「新自由主義国家は、個体能力に基づく競争の全社会化、日常化によって階級・階層格差の拡大や不平等化が生じるのはやむをえないとするだけでなく、不平等な現実を個人単位で引き受け、受忍するよう方向づける」⁹⁾と現代社会の状況を説明しており、それはまさに個人主義がすべての人に対して社会から強く求められていることを表しているといえよう。こういった新たな個人主義化の状況が、現代社会そのものにも大きな影響を与えているのであり、例えばBauman¹⁰⁾が指摘する“リキッド・モダニティ^{†10)}”は、その展開過程の典型として考えられよう。

以上のように啓蒙思想の特徴と現代への展開を理解することが出来るが、その展開には大きく分けて2つの方向性があったという点が重要である。小池¹¹⁾によれば、その一つが“文明原理”としての啓蒙であり、カントの思想に基づき、いうならば知識人や官僚が主導する「上」からの啓蒙である。もう一方が、“文化的原理”としての啓蒙であり、J. G. Herderの思想に基づき、感性や構想力、土着的言語による相互行為の圏域の形成という課題をもつ

た「下」からの啓蒙である。これは、全体からの統制よりも、それぞれの違いを生かした社会の形成と発展を意図した側面ともいえよう。

ここまで確認してきた近代における人間観の変遷は、結果的に経済や政治的側面の強い「上」からの文明原理としての啓蒙であったことは明白である。ただし、近年近代社会の見直しが問われることが多いが、それは文明原理そのものを批判し、排除するものではない。あくまでも「上」からの啓蒙のみによるものであり、「下」からの“文化的原理”としての啓蒙が求められているのである。すなわち、“文化”から“文明”を問い直すことが求められ続けているのである。

この「上」からの“文明原理”と「下」からの“文化的原理”は本来相互に影響を与えるものである。その中で社会福祉は、個々人の視点に立つというその特質として、常に「下」からの“文化的原理”としての立場に立たなくてはならない。この“文化”を重視する立場をもって、社会福祉は社会生活を営む個々の人々のための制度まで含めた実践として、変化を促すという本来の役割を果たさねばならず、その“文化”を重視した人間観を持たねばならないのである。

3. 文化的原理に基づいた人間観の特質と検討

社会福祉は個々の人々の視点から働きかけていくものでなければならない。そのため社会福祉は、“文明原理”としての人間観に加え、土着的に形成される“文化的原理”のもとに人間を捉えていくことが必要である。それは社会福祉が常に主体的な変革を視野に入れた生成的側面をもつということでもあろう。すなわち、現代では政治や経済の立場から、個人主義に基づいた人間が強く求められ、想定されることによって、「上」からの強制的な変化がもたらされている。こういった立場の一番の問題点は、その人間観がすべて社会の側から考えられているという点にあり、それが大きな制約性をもって文化的多様性を持った現実を規定していることに気づかないことにある。そこでは、社会の規定する枠に収まらない対象は排除されるか同一化されるしかない。社会福祉は個々の人々の立場に働きかけていく側面を有しており、その生活の意味を捉え、生成的側面を支援しつつ、常に社会に対して既存の制度・構造を変更するように働きかけていく人間観を持たねばならない。ここでは、その生成に対する思想的基盤を考えていく上で、文化的原理としての啓蒙の基礎となるHerderの人間に対する思想について確認していきたい。

Herder¹²⁾ は、近代化が進む18世紀に活躍した哲学者であるが、当時形成されつつあった近代的な人間観に異議を唱えた人物でもあった。彼は、近代における人間が数学的方法によって特色づけられるようになった点について、それは非常に限定された側面でしかなく、もっと人間そのものを捉える必要性を説き、“言語”に着目している。つまり言語こそが人間を捉えることができるものであり、“文化”を重視する彼の姿勢そのものを示している。“言語”に着目する点は、現代においては社会構成主義とも結びつく点であるが、ここではすべての民族が文化をもっており、その民族の有する風土に着目していくことが人間を捉える一つの視点となる点に着目していく。彼の人間観の一つの特徴は、異なった風土で生きる人間はそれぞれに文化が異なり、それにより当然認識主観も異なるため、すべての民族の等しい人間性の展開を認める点にある。西洋の絶対的な優位性を否定し、多様性を尊重する姿勢を示しているのである。

そして、それは近代哲学に対する見直しも含んだものとして考えねばならない。近代哲学の主流は自然と人間を対立的に考える点にあるが、彼はそれを分割不可能な根源的存在として捉えている点に特徴がある。つまり、自然と人間という2つの存在から人間を考えるのではなく、1つの全体的存在から人間を考えており、包括的かつ全体的な概念として“人間性”を位置づけているのである。それは、人間による自然の支配を否定し、むしろ様々な関係の依存性を強調する人間観を導いていると考えねばならないであろう。

また、大村¹³⁾ は、Herderの考える自然と、さらに人間の理性に対する考えにおいて、それがいかにカントと異なっていたかを検討している。カントが考える自然とは、ある限定された範囲においてのものであり、明らかにされるのは抽象性をもった法則的な自然の論理である。ここで基盤にあるのは自然と人間の非共通性であり、その連続性を認めない点にある。そのため、カントの考える道徳は自然を区別し、そこにある全体性を否定するのである。Herderが着目するのはむしろ法則性から取り残された具体性であり、自然と人間の統一性を重視するのである。つまり統一的に捉えるということは、自律した自由な存在でありながらも、尚規定される側面をもった存在として人間を考えていくということの表れであろう。

さらに、この理性はカントにとっては生得的であり、本来備わっているものである。一方で、Herderにとって理性とは“生成・形成”されるも

のとして位置づけられる。つまり、発展的な考え方で人間を捉え、固定化されたものではなく常に変化する存在として捉える基盤を提供しているのである。それは、変化していく可能性をもった人間観を示していると考えねばならないであろう。

以上のようにHerderの人間観について確認できるが、そこでの人間とは、様々な文化を持つことによって多様性を有し、それが尊重される中で依存し合いながら生きていく存在であり、全体的な統一性をもって常に生成・変化する存在と考えられる。そういった文化的原理に基づいた人間観とは、文明原理が求める自律性や合理性を必ずしも絶対視していない。自律性も合理性も生成・変化の中の一つの過程であり、それは固定化されたものではないのである。そういった変化への流動性を持った人間観こそが、文化的原理の一つの特徴と考えねばならないであろう。

そういった点に関連して、例えばA. Sen¹⁴⁾ は、現代経済学における人間の合理的な行動という前提に対して、特にその自己利益と合理性との結びつきの側面に対しては、必ずしもそれが絶対的なものではないという点を明らかにしてきている。Sen¹⁴⁾ によれば、例えば自由主義的人間観の代表とされるアダム・スミスは、実際には共感や倫理的思考の役割などにも言及しており、その現代経済学理論の欠陥は、幅広い人間観を狭め、限定的に捉え、倫理的側面との乖離を進めてきたことにあると主張している。それはある一側面からのみ捉え、それ以外を排除するという情報制約性を批判し、その制約性の克服から新たな展開を求めるものである。すなわち、生成的かつ変化の側面を視野に入れていられる。また、Senの場合、合理性などの工学的な側面も必要不可欠な側面として認識しており、理念的なもののみにとどまらず、実践的な志向との結びつきの重要性も主張している。

近年では、特にこの理性や合理的判断を自らの内に兼ね備えた強い個人像としての人間観に対する見直しだが、社会福祉学の中から主張され始めている¹⁵⁾。ただし、それは単に強い個人像に対する否定であってはならない。むしろ、その状態を固定化し、それ以外の側面を排除してしまう制約性にあると考えることが必要である。文化的原理は、そういった制約性を乗り越え、その人間観の生成的特徴の理解を必要とするのである。次節では、こういった点から明らかになる社会福祉の人間観の課題を検討し、考察を深めていきたい。

4. 社会福祉における人間観の課題とこれからの方向性

以上のように、人間観は歴史的に変化し構成されてきたものであり、特に啓蒙思想の影響を受けながら変化してきていることが明らかになった。それは、経済的な側面に立った個人化であり、ある一面から限定的に捉えられた人間であるが、少なくとも現在進められている社会福祉の方向性は、その影響を受け、本来の社会福祉の意義が曖昧になってきていると考えられる。その問題点を克服していく一つの鍵が文化的原理から人間を理解していく方向性といえる。ここではその点についての考察を深め、社会福祉における人間観の課題と方向性について明らかにしていきたい。

強い個人像としての人間観は、確かに人間が国家からの圧制を乗り越え、一人ひとりの権利を獲得していく上で必要不可欠ではあった。しかしながら、上記の歴史的な過程の中でプログラム化されてきた近年の社会福祉における利用者像（人間観）は、経済的側面に強く影響を受け、「自ら必要な情報を積極的に集めて自己にとって最善の選択をしようとする人間像」であり、加えて「自律性と自己利益の追求という特性」を合わせもった「賢い消費者」¹⁶⁾である。近年、例えばイギリスの社会福祉において、第三の道の方向性が示されたが、そこにある人間観は、同様に「『勤労し競争力を持つ』意味での『強い個人』を前提」においており、「それに基づいた『連帯性』を描くことは、人々をそういった『強い個人』へと修正しようとする矯正の権力を内在させている」¹⁷⁾とも考えねばならないのである。

その「強い個人」を前提とするあり方には、大きな問題がある。例えば、衣笠¹⁸⁾は、ソーシャルワークにおける価値を検討する中で、強い個人像が抱える問題点について明らかにしている。上記からも明らかなように、強い個人という、いわゆる理性的存在としての「人格」は、近代の社会が形成される中で作り上げられてきたものである。近代の西洋で展開された啓蒙運動は、この自律の獲得を目指したものであった。そして、その後の展開の結果、自己決定できる個人こそが主体であり、自律した存在こそが尊厳あるものとみなされることになったのである。ソーシャルワークにおいては、この主体のあり方について肯定し、実践を組み立てているが、そういった「強い個人」に価値を置く論理は、「弱い個人」を淘汰する側面をもっている。それは、個人の尊厳に価値を置くソーシャルワークが抱えるパラドクスであるといえる。つまり、近代の社会が形

成してきた「強い個人」としての人間像は重要であるが、そのみに陥らない新たな尊厳の主体を位置づける論理が求められているのである¹⁸⁾。

これまでの「上」からの文明原理に基づいた人間観は、経済・政治的側面が強く、人間の境界線を固定化し、二項対立的で静態的な捉え方しか出来ない点に問題がある。社会福祉は、「弱い個人」から「強い個人」への転換を目指すものではない。例えば田中¹⁹⁾は、個人への評価は、「障害のある人」と「障害のない人」と2つに分けることを前提にすべきではなく、われわれは、時に障害のある側に、ときに障害のない側へと行き来する浮遊する存在である、という視点をもつほうが現実的であると考えている。それはまさに、どちらかに価値があるという二項対立的な理解ではなく、そういった状態は常に生成・変化しながら存在するものであり、変化する存在としての人間観の必要性を示しているのである。

さらに、二項対立的に規定し、「強い個人」に収斂する限定的な議論は、人間の生きていく時間を無視した議論に陥ってしまうことも無視できない。すなわち、議論の焦点が、平均的な個人としての成人一般を静態的に捉えているのである。例えば、子どもは違うと考えるのであれば、それは人間の生涯を通じた連続性を無視した考え方である^{†11)}。岩崎²⁰⁾が指摘するように、子どもや障害者、高齢者も含め、多様な環境や個体条件にある個を、同一の視点で理解できるようにならなければならない。つまり、成人一般という平均的視点とそこへの収斂という限定性を克服し、いかにその動態性ないし可変性を認め、価値を見出すかという点が、社会福祉にとって必要な人間観の視点と考えられるのである。

この動態性を特徴とするということは、社会福祉は何らかの固定的な観点に陥らないということの意味している。むしろ、それぞれの観点が組み合わさり、より高め合っていく生成的な特質をもっていると考えられる。それは、社会福祉が有する価値であり、一方が他方を排除していく二項対立的な認識を超え、新たな関係論として共生を考えていく契機ともなっている。

岡崎²¹⁾によれば、共生とは、それぞれの差異を認め、その独自性を尊厳の対象としていく。美しい理念ではなく、また単なる調和でもなく、様々な矛盾や葛藤を含んだ上での積極的な関係性の構築が目指されるのである。この共生は、個々の差異を尊重していくことからわかるように、異質であることを前提として個人を考えていくが、それが求められる背景には、現代における社会的な差別や排除の問題

がある。社会的な差別や排除は、異質な側面を許容せず、異なりに優劣をつけ、二項対立的に否定していくことから生じるものである。共生はこういった側面を、差異の尊重という関係性の転換から捉えなおしていくものなのである。

そして、この解決を具体的に支援していく過程において共同が求められる。現実的に弱い立場に追いやられている人たちが、その状況を打破するためには、共同あるいは共同体としての連帯した取り組みが不可欠となる。連帯にはなんらかの価値や目標の共有が不可欠であり、社会を安定化させ、社会全体の利益を高めていく側面を持つものである。すなわち、共生と共同とは、相互補完的な理念なのであり、「共同の関係が同質化を強要するように矮小化していく場合には、『共生』はむしろ積極的な対抗理念となり、他方、『共生』が赤裸々な『生存競争』を隠蔽するものになるのに対しては、『共同』が対抗理念となる」²¹⁾のである。これはどちらかを選択するというのではなく、共生としての差異も共同としての連帯も常に共に高め合っていく相補的であることを意味しており、この両者は社会福祉の人間観にとって必要不可欠な関係論を示し、基盤となる価値・思想であると考えねばならない。

そのような新たな関係論から社会福祉の人間観を考える際には、常に“反本質主義”の立場²²⁾を忘れてはならない。坏²²⁾によれば、そもそも本質主義とは、対象を固定化し、一般化していくことを意味している。社会福祉にとって、何らかの制度的な対応を考える際にはそれぞれの持っている差異を本質化していくことは避けられない。むしろその意義は積極的に認めなければならないであろう。しかしながら、そこで固定化しない点に社会福祉の特徴がある。すなわち、そこで本質化されたものの可変性を認め、その動的な側面を視野に入れていくということは、そういった固定的な側面を常に変化の過程に位置づけていく役割を果たすのである。

そのため、坏²²⁾も指摘しているように、様々な文化的・社会的な背景・差異に着目していくことが社会福祉において重視されるが、それを逆に一律的に固定化していくことも問題を持ったものとして認識しなければならない。ここまで述べてきたように“文化”を重視することは重要ではあるけれども、それが一律化され、固定化されることもまた注意しなければならない。すなわち、前節で確認した文化的原理を生成・変化という差異の論理のみにとどめるだけでなく、連帯を常に視野に入れた関係論として考えていかねばならないのである。

価値や思想も含む文化は差異にも連帯にもなり、

そこから人間観の変化の起点をつくり、現実の個々の生活などにおける構造や機能の生成を可能とする力動的な原理を構成すると考えねばならない。それは、これまでの考察でも確認してきたように、常に本質化を避け、変化のプロセスに位置づける原理を考えていくことである。そしてその力動とは、二元論や要素還元とは異なった新たな関係論からなる変化の原理を意味している。それは、どちらか一方を排除するものではなく、差異を認め合って新たな状態を創りだしていく関係性の在り方なのである。

すなわち、啓蒙思想などを経た人間観の変遷を通じ、限定された側面から人間を捉え、それを固定化していく文明原理を注視し、文化的原理の視点をもった新たな関係論の側面から生成的な力動を生み出す人間観こそが社会福祉の人間観である。それは、ある限定された一側面（ここでは特に自律などの能力）から人間の本質化を図る経済や政治に、共生と共同の相補的な関係をもった変化の過程にあり続ける文化的原理に沿った人間存在の在り様を創りだすことと考えねばならない。それこそが社会福祉における人間観の特徴であり、今後の社会福祉を考えていく基盤となると考えられるのである。

おわりに

ここまで啓蒙思想等を通じた人間観の変遷を明らかにすることによって、その形成された人間観の歴史的意義を確認してきた。そして、そこから文化的な原理に着目し、その特徴に対して検討を加えることによって、生成・変化する人間観への考察を深めてきた。強い個人へとプログラム化されている現代において、文化的原理に沿う共生を視野に入れた新たな関係論による人間観が社会福祉には必要なのである。そのことは、社会福祉における人間観が常に現実の生活の構造や機能に対して生成的な力動を与える立場から考えられなければならないことを意味している。個々の人間の主体性が全体に埋没し、失われている時には主体的な人間観に立ち、それぞれの差異の尊重から人間を考えねばならないし、逆に過度に主体性が要求され、差異が本質化される時には人間の依存性を認めつつその連帯性をもった人間観を考えねばならない^{†12)}。これは相補的な関係にあり、その生成的である関係性が実践的であることと結びつくのである。

そのため社会福祉学は、こういった人間観の検討から明らかになる関係論の力動を科学的に位置づけるものでなければならない。これまで、社会福祉は科学的であることが求められる一方で、近代科学に

そのまま従うものではないと主張されている^{23,24)}が、それは二項対立的な分析的側面に加え、この人間観に見られたような関係論からの力動を視野に入れた生成的な側面を重視するからである。そうであるにもかかわらず、そういった側面に対する検討は

近年ほとんど行われていない。人間観に加え、この科学性に関する視点が、今後社会福祉理論を考えていく上では欠かすことができない。本研究ではその点に対して踏み込むことはできなかったが、今後の課題として考えていくことが必要であろう。

注

- †1) 中村¹⁾は、今日の社会福祉は特にキリスト教という宗教の世俗化から生成された歴史的産物であると主張している。
- †2) それは当時の貧困に対する考え方に表れている。貧困とは避けることのできないものであり、その運命に従うことが当たり前であると宗教的背景を持って考えられていたのである。
- †3) 柴田²⁵⁾も、社会福祉の歴史的展開においてこのヒューマニズム運動が果たした役割を重視して考えている。柴田によれば、ギリシャ文明や初期のローマに見られたように、自然からの人間の解放を目指した流れが第一のヒューマニズム運動だとすれば、ルネサンスは第二の運動であり、また、18世紀から19世紀にいたる近代社会の形成は第三の運動である。そして、福祉国家や社会主義国家を生み出したものが、第四の運動として整理されているのである。後述するが、21世紀になった現在、福祉国家からのさらなる展開として第五の運動が起こりつつあり、社会福祉の新たな展開はこの点にあると考えられる。
- †4) 例えば、この宗教改革の影響もあり、西洋では病院の役割がcare (魂の救済) からcure (治療) へと変化している。こういった歴史的な背景のもとに、近年盛んに用いられるケアマネジメントを再考していくことも必要なかもしれない。
- †5) ただし、本稿で詳細に検討することはできないが、啓蒙の論理が女性の解放を直接に生み出したわけではない²⁶⁾。それは本稿でも検討していく関係論の観点から考えることが重要となってくるであろう。
- †6) この社会契約と人権については、功利主義との関連からの考察も有効である。19世紀から20世紀にかけて社会福祉を先導した新自由主義やフェビアン主義が、共通して保持していた思想が功利主義であり、「個人に対する全体の優位を認めず、国家もまた社会における一組織として捉えようとする功利主義と、自然権の保全のため個人に対する全体 (= 国家) の優位を主張する契約説とは、どこまでも融合困難な近代民主主義思想の二大潮流として今日に継承されている」³⁾と考えられている。人権の普及に大きな貢献を果たしたのは契約説である一方で、それは個人と国家の間に介在する中間団体を認めていないため、全体主義へ陥る危険性を常に孕んでいるのである³⁾。これは、人権の持つもう一つの側面であり、例えば、功利主義を排除してきた日本の社会福祉は、今後は全体を優位とする視点のみならず、功利主義を再評価していく必要もあると考えられている。ただし、功利主義の理解に対しても再検討し、この点をさらに深めていくことも今後の課題であろう。
- †7) 人間の論理的で自由に考える能力への信頼は、すでに古代ギリシャやローマの思想家の著作に散見できる⁵⁾。ただし、当時のそれはかなりの特権階級に限定されたものであり、近代以降の背景とは異なって理解する必要がある。
- †8) 福沢諭吉は多くの人の知るところであるが、加えて、明治維新时期における日本の啓蒙思想家として、中村正直がいたことも忘れてはならないであろう。中村は、Samuel Smilesによる『Self-Help』を1870年に『西国立志編 原名 自助論』として翻訳し、広く西洋の文明を日本に浸透させることに貢献した。平川²⁷⁾によれば、それは日本人が英語から一冊まるごと翻訳した初めての書物であり、日本の人口が約3000万人ほどだった明治末年までに、100万部を超える部数が出版された。
- †9) 彼らは「獲得型個人主義」に対置するものとして、「倫理的個人主義」についても説明している。これは、共同体の利益を優先するものとあるが、個人の自由や自律を重視するものであることは変わらない。第三の道で目指されたのは、個人の自由や自律を重視しつつ、同時に社会的連帯を強化するという考え方であったが、後述するように、自由や自律を絶対視し、それ以外を排除してしまうような方向性を再検討することも今後必要となろう。
- †10) 「『リキッド・モダン』社会とは、そこに生きる人々の行為が、一定の習慣やルーティンへと〔あたかも液体が固体へと〕凝固するより先に、その行為の条件の方が変わってしまうような社会」を意味している²⁸⁾。すなわち、価値あるものと堅固に考えようとするものが、その次の瞬間には状況が変わり、そう考えることが難しいような流動的な社会といえる。
- †11) 岡崎²¹⁾は、生活の質 (QOL) を検討する中で、その“Life”について、「生命」「生活」に並び、現在問われなければならないことは、「人生」の視点であることを言及している。それは、人間としての連続性を視野に入れ、その動的な様相を検討しなければならないことと結びつくと考えられる。
- †12) この意味で考えるならば、地域では様々な状況の人たちが生活しており、そのため差異と連帯が同時に求められ、地域福祉が開発的機能と結びつくことが示唆される。

文 献

- 1) 中村剛：社会福祉における固有な人間理解—存在者・存在・他者という3つの次元から—。社会福祉学，47(2)，3-15，2006。
- 2) 柏女霊峰：福祉と価値（1）—仏教及び親鸞の人間観から社会福祉が学ぶもの—。淑徳大学社会学部研究紀要，32，1-16，1998。
- 3) 細井勇：近代的慈善と社会契約説と功利主義—戦後社会福祉理論の再検討に向けて—。福岡県立大学人間社会学部紀要，13(1)，91-109，2004。
- 4) 関家新助：西洋哲学思想と福祉—人権思想を中心に—。初版，中央法規，東京，2004。
- 5) Ishay R.：The History of Human Rights：From Ancient Times to the Globalization Era. The University of California Press, 2004.（横田洋三 監訳，滝澤美佐子，富田麻里，望月康恵，吉村祥子 訳：人権の歴史—古代からグローバリゼーションの時代まで—。初版，明石書店，東京，2008。）
- 6) 秋山智久，阿部志郎，一番ヶ瀬康子，岡村重夫，嶋田啓一郎，仲村優一，吉田久一：座談会 社会福祉研究における思想と理論。大塚達雄，阿部志郎，秋山智久編，社会福祉実践の思想。初版，ミネルヴァ書房，京都，283-318，1989。
- 7) 宮川透：現代日本思想史Ⅰ 明治維新と日本の啓蒙主義。初版，青木書店，東京，1971。
- 8) Giddens A, 渡辺聰子：日本の新たな「第三の道」—市場主義改革と福祉改革の同時推進—。初版，ダイヤモンド社，東京，2009。
- 9) 中西新太郎：リアルな不平等と幻想の自由—新自由主義「社会開発」の特質と帰結—。竹内章郎，中西新太郎，後藤道夫，小池直人，吉崎祥司，平等主義が福祉をすくう—脱〈自己責任=格差社会〉の理論—。初版，青木書店，東京，1-45，2005。
- 10) Bauman Z：Liquid Modernity.（森田典正 訳：リキッド・モダニティー—液状化する社会—。初版，大月書店，東京，2001）
- 11) 小池直人：「生活形式」の思想史—デンマーク社会研究への序論—。竹内章郎，中西新太郎，後藤道夫，小池直人，吉崎祥司，平等主義が福祉をすくう—脱〈自己責任=格差社会〉の理論—。初版，青木書店，東京，105-145，2005。
- 12) Herder G：Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit. 1791（鼓常良訳：人間史論Ⅰ。初版，白水社，東京，1948。）
- 13) 大村晴雄：ヘルダーとカント。初版，高文堂出版社，東京，1986。
- 14) Sen A：Inequality Reexamined, Oxford University Press, 1992（池本幸生，野上裕生，佐藤仁 訳：不平等の再検討—潜在能力と自由—。初版，岩波書店，東京，2002。）
- 15) 窪田暁子，高城和義 編著：福祉の人間学—開かれた自律をめざして—。初版，勁草書房，東京，2004。
- 16) 秋元美世：社会福祉の利用者と人権—利用関係の多様化と権利保障—。初版，有斐閣，東京，2010。
- 17) 近藤康史：個人の連帯—「第三の道」以後の社会民主主義—。初版，勁草書房，東京，2008。
- 18) 衣笠一茂：ソーシャルワークの「価値」の理論構造についての一考察—「自己決定の原理」がもつ構造的問題に焦点をあてて—。社会福祉学，49(4)，14-26，2009。
- 19) 田中康雄：障害児保育を医療の観点から考える。鯨岡峻 編，障害児保育。初版，ミネルヴァ書房，京都，45-73，2009。
- 20) 岩崎晋也：社会福祉の人間観と潜在能力アプローチ。人文学報，291，49-68，1998。
- 21) 岡崎利治：社会福祉専門職の援助基盤としての人間観の検討。京都女子大学生活福祉学科紀要，4，45-53，2008。
- 22) 坏洋一：批判的福祉対象論に向けての試論。長崎国際大学論叢，2，127-137，2002。
- 23) 岡村重夫：社会福祉研究方法論（社会福祉と諸科学）。社会福祉学，1，3-7，1960。
- 24) 嶋田啓一郎：社会福祉研究の方向を求めて（社会福祉と諸科学）。社会福祉学，1，8-31，1960。
- 25) 柴田善守：社会福祉の史的発展—その思想を中心として—。初版，光生館，東京，1985。
- 26) 森田美芽：自由，平等，友愛は何をもたらしたか—リベラリズム，フェミニズム，絆—。石崎嘉彦，紀平知樹，丸田健，森田美芽，吉永知加，ポストモダン時代の倫理。初版，ナカニシヤ出版，京都，40-53，2007。
- 27) 平川祐弘：天ハ自ら助ケルモノヲ助ケ—中村正直と「西国立志編」—。初版，名古屋大学出版会，愛知，2006。
- 28) Bauman Z：Liquid Life. Policy Press Ltd, 2005（長谷川啓介訳：リキッド・ライフ—現代における生の諸相—。初版，大月書店，東京，2008。）

（平成23年12月1日受理）

The Problem of a View of Humans in Social Welfare –Focus on Creation–

Katsuki NAOSHIMA

(Accepted Dec. 1, 2011)

Key words : a view of humans, enlightenment, culture, dualism, creation

Abstract

Understanding a view of humans is necessary to view and consider their social welfare. The aim of this work is to clarify the program of a view of humans from the Middle Ages to the present-day, focusing on Western society, and to consider the problem of a view of humans in social welfare which takes as its subject new developments in this theory.

The program of a view of humans has been constructed as liberal and rational humans because of the effect of the Enlightenment. But, it is clear that individualism is formed by economics, and it forms a view of humans in social welfare. Social welfare is not limited to the dualistic understanding that a human changes powerlessness into powerfulness. It is clear that a consideration for interdependent human creation which Herder examines is necessary.

We have to call attention to the creational view of humans as necessary in social welfare. This directs that the human has more of a difference in culture and growth than the average. Therefore, the changeability is always essential to a view of humans in social welfare, being careful to the exclusion of relativism.

Correspondence to : Katsuki NAOSHIMA

Department of Social Work, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurasiki, 701-0193, Japan
E-Mail : k-naoshima@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.21, No.2, 2012 174 – 183)